

## 野毛山動物園飼育下オグロワラビーにおけるカンガルー病調査

真砂聖令菜

(横浜市立野毛山動物園)

カンガルー類における顎の腫脹が特徴的な細菌性骨髄炎は、通称「カンガルー病 (KD)」と呼ばれるほど代表的である。病原菌は *Fusobacterium necrophorum* だと言われているが、分離・培養頻度に基づくのみであり、確かな根拠はない。本調査では、野毛山動物園で個体登録されたオグロワラビー (*Wallabia bicolor*) 全 87 頭における KD 罹患状況の把握と死因調査、発症部位、現飼育個体 4 頭におけるフソバクテリウム属菌保有状況および、薬剤耐性状況の調査を行った。その結果、87 頭中 37 頭 (44.8%) が KD に罹患していたことが分かった。また現飼育 KD 罹患個体 No. 83 より、フソバクテリウム属菌の中でも病原性の高いとされる *F. necrophorum* subsp. *necrophorum* (Fnn), *Fusobacterium varium* が分離された。これらの株は、外毒素であるロイコトキシン産生遺伝子 (*lktA*) 陽性であり、十分に KD の病原菌になり得ると考えられた。オグロワラビーにおいて、亜種レベルでフソバクテリウム属菌を調査し、さらに *lktA* 陽性の菌株を KD 発症部位から直接分離したのは、本研究が初報告となった。